

保育者の新しいノート (6)

S. K. 生

(1)

○保育者としての、ほんとうに新しいノートをつけなければならない時が来た。幼稚園が廃止せられて、新しい學校教育法の一部として、全く新しい面目にあらたまつたのである。所謂六・三・三の新制と共に、その教諭としての頭の切りかえが叫ばれているが、わたしたちとしても、新しい幼稚園教諭にならなければならないことに樂りはない。

○そこに胸のときめきも、緊張も、希望もある。その希望の明るく、廣く、遠く、大きいのはいうまでもない。胸のときめきといえは、年々の新入園児を迎える四月にけ、自分も新しい先生になつたときときを経ずるのであるが、ことしは、それこそ新幼稚園の發足の最初の幼稚園教育者として、嘗てなほときめきを感じずにいられない。園舎や保育室は古くても、なんとという新鮮な氣に充ちていることか。

○それにつけても、たとゝ梨分だけの新らしきでは濟まない。決心だけの鮮かきでも足りない。新しい實行は、先ず新しい研究に出發しなくてはならない。新しい研究、實に新しい研究にこそ、わたしたちが新しい幼稚園教育者になれるとがある。それも、新しいことを研究し、新しい方法を知るということだけではない。研究態度の新鮮さこそ大切なのである。

(2)

○それにしても、新しいものを新しいと感じる心がなくては、新しい研究態度も起り得ない。しかも、その、新しいものを新しいと感じることが、なかなかむずかしい。古い経験があり過ぎると、その邪魔になる。浅い経験しかないものには、どこが新しいかを見出す力が足りない。老手は手なれた巧者が、自分を新しくさせにくい。新参者は折角の新らしきに心づくまでに至らない。そうして、いつのまにか、そのまゝにまた、鈍い日々を平氣で送ることになる。恐ろしいことだ。

○顔を洗つて出直せという言葉がある。わたしたちとしては、教育思想を洗つて出直すことである。

(3)

○考えあぐんだら夢中になつて幼児とあそぶことだ。分らなくなつたら大きな聲を出して幼児といつしよに歌うことだ。まどいが起つたら一層うんと働くことだ。ゆきつまつたら兎に角日々の園務をきちんきちんと片づけでゆくことだ。子どもと勞働は、どんな時にも心を新しくする。子どもと共にたからかに笑い、勞働に汗を出せば、自分でも思ひかけず心氣一轉する。折から空は美しく土はやわらかく自然にいきいきしている。ぐずぐずしていないで、子どもと遊び、よく働こう。